授業づくりグループ①

生きる力を育む授業づくり
～自ら体験することで学ぶ～

橋本直紀

1．はじめに

「よー　におうとるわ」（とても似合っているね）ゴム長に麦わら帽子と軍手、中には首タオルの出で立ちで畑に向かう生徒を見ての或る教師の言葉である。学校菜園は体育館の横に並列に２ヵ所あり、それぞれ約４ｍ×19ｍの木枠などで囲った場所に土を盛って作られている。そのうちの１ヵ所を高等部の作業学習で栽培班が使用している。その耕地を６ブロックに分けてそれぞれのブロック毎に各種野菜を栽培した。秋晴れの一日、穏やかな日ざしを浴びて様々な形をした緑の葉が輝いている。収穫も間近である。

2．研究の視点

生活の基本であり、生きていくための原点でもある「食」をキーワードに「栽培」「自然」「健康」「安全」などの観点で研究を行うこととした。

そこで従来からある作業学習の栽培班での授業を取り上げ、子どもたちが自ら体験する野菜の栽培・収穫と販売活動などの、野菜作りを主体とした体験的な授業の中で実践を行うこととした。そこから一人ひとりの子どもたちの可能性を探りながら「生きる力」を育むためのきっかけにしていきたいと考えた。

本来の作業学習での主なねらいとしては、働く意欲や持続力を養い、技能や知識を身につけ、一人ひとりが作業工程や内容に習熟することが求められている。しかしながら生徒たちの実態に目を向けると、積極的に活動に臨む態度が見られない、身体を動かすことが苦手、学習の場になかなか足が向かない、自分の好きなことだけにしか関心を示さない、皆と一緒に活動できないなど一人ひとりの生徒の課題は多岐に渡る。まず作業活動に対しての興味や関心を如何に喚起するかが求められる。

そこで作業活動をほとんどの生徒が関心を示す「食」と関連させることでよりインパクトのある授業にしたい。もっと喜びや驚きなどの感性に働きかけることにより、作りだすことの楽しさを体験させ、単に「たべる食」から「つくる食」へとつなげ、働くことに対する前向きの意識を高めていきたいと考えた。

土作りや作物の育成を通して自然に親しむとともに、環境への配慮や関心をもち「食」との関連性から自分の健康や安全についても考える機会としたい。

3．今年度の実践

高等部の作業学習は週に３日、昼を挟んで３時限ずつ行われている。４つの班があり、その内の一つである栽培班は生徒７名と教師２名で構成されている。栽培班の専用の畑で野菜を栽培・収穫し、収穫に合わせて販売活動も行った。栽培作物としては根菜類を中心に大根、ジャガイモ、里イモ、人参、ゴボウなどの野菜を取り上げた。（図１）

また、耕地を６ブロックに分け、季節に合わせた野菜をそれぞれブロック単位で栽培した。管理や作業をしやくするとともに、子どもたちにも当日の作業場所や作物の認識、活

動の見通しがもちやすいと考えた。(図２)

従来は栽培した野菜をバザーなどでそれぞれ単品で販売していたのだが、今年度は自分たちが栽培した野菜と「食」とのかかわりをもっと強く印象づけたいと考えた。そこで実際の料理を想定して関連した野菜を栽培し、収穫した後それらの野菜をセットにして販売した。販売日の直前には試食の機会も設けた。実際の料理を知ることで、栽培作業や販売活動への意識を高め、野菜類をより身近に感じて欲しいと考えた。

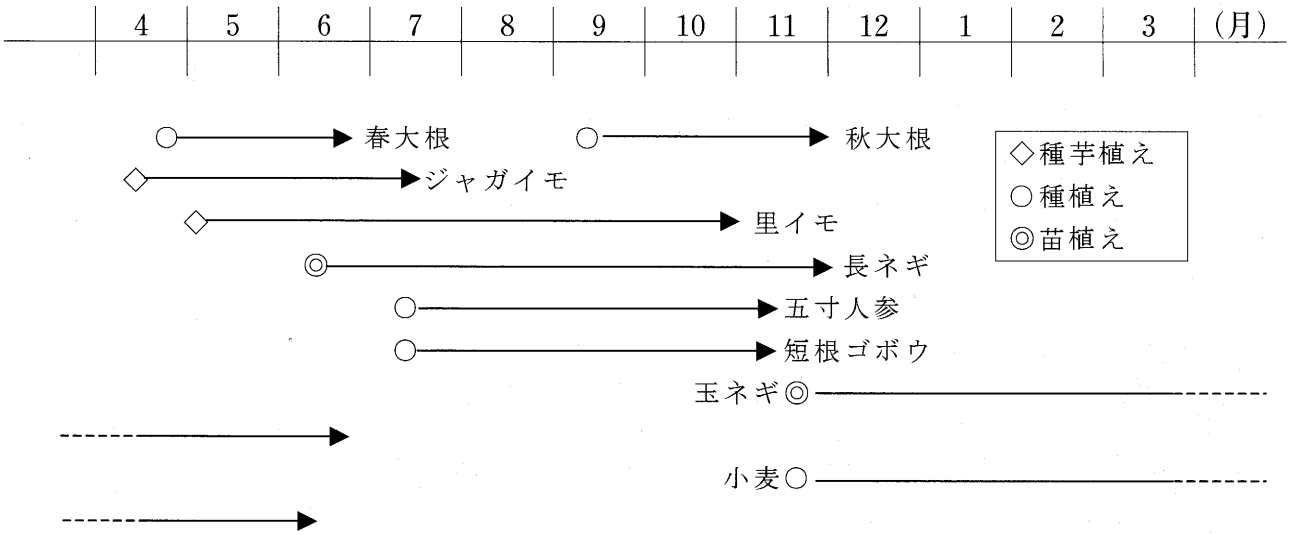
取り上げた作物の栽培過程はほぼ共通しており、作業の流れを表にして、長いスパンの栽培活動をよりイメージしやすくした。長いスパンで、同じようなパターンで繰り返す活動のメリットを生かしたい。(図３)

授業の成果として作業活動が子どもの成長にとってどの様に反映されているのかを客観的に導き出すために作業日誌と併せ、生徒一人ひとりの活動や様子を観察し記録した。

(表１)

４月「荒起こし」

５月　ジャガイモ「追肥」



※栽培が学期を越える作物（里芋　長ネギ　五寸人参　短根ゴボウ）

※栽培が年度を越える作物（玉ネギ　小麦）

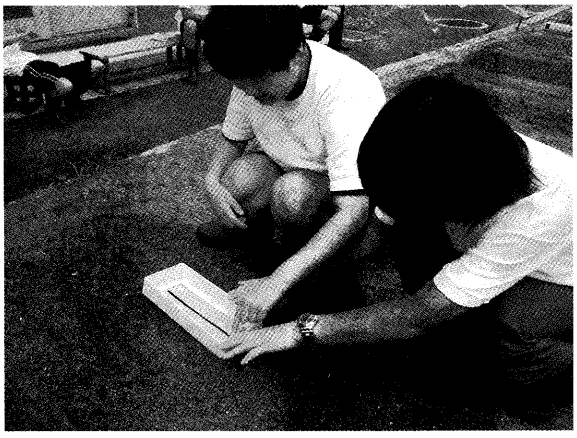
図１　栽培作物と栽培期間

・ジャガイモ 4～7 ・玉ネギ 11～	・ジャガイモ 4～7 ・秋大根 9～12	・里イモ 5～11	・春大根 4～6 ・五寸人参 7～11	・玉ネギ ～6 ・短根ゴボウ 7～11	・長ネギ 6～12

※小麦は別の場所で栽培　　数字は栽培月

図2　各ブロックの作物割り付け

6月　玉ネギ「収穫」



7月　五寸人参「種まき」

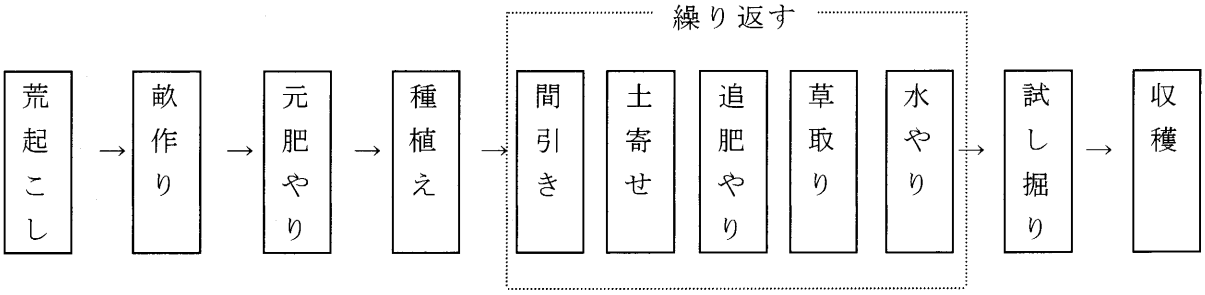
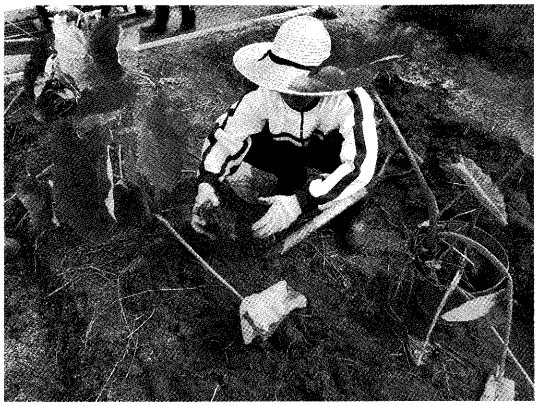


図3　栽培作業の主な工程と流れ

9月　秋大根「種まき」



10月　里イモ「収穫」

表１　主な作業内容と生徒の評価

Ａ一人可　Ｂ要声掛け　Ｃ要支援　Ｄ不参加　－作業なし

月	主な作業内容	生徒名						
		I 男	T 男	K 男	M 子	S 男	N 子	Y 男
4	草取り	B	B	D	C	D	B	B
	荒起こし	B	B	C	C	D	B	B
	ジャガイモの種芋植え	A	B	C	C	D	A	B
	春大根の種まき（補助具有り）	－	B	D	C	D	B	B
	里イモの種芋植え	A	B	C	C	D	A	B
5	椎茸原木の穴開け・植菌	A	A	C	D	D	B	A
	春大根の追肥	A	B	D	C	C	A	B
	ジャガイモの芽かき	C	C	D	C	D	C	C
	ジャガイモの追肥	A	B	D	C	D	A	B
	ジャガイモの土寄せ	B	B	D	C	D	B	B
6	小麦の収穫	A	B	D	D	D	A	B
	春大根の間引き	B	B	C	C	D	B	B
	長ネギ用の藁切り	B	A	D	A	D	A	A
	長ネギの苗植え（補助具有り）	A	B	D	C	D	A	B
	春大根の収穫	A	A	C	C	－	－	－
	草取り	B	A	D	D	－	－	－
	玉ネギの収穫	A	B	－	－	－	A	A
7	荒起こし	A	B	－	－	－	B	A
	ジャガイモの収穫	A	B	C	C	C	B	B
	短根ゴボウの種まき（補助具有り）	A	A	D	D	D	A	A
	五寸人参の種まき（補助具有り）	A	B	D	B	D	A	A
	長ネギの追肥	A	B	D	C	D	A	A
	長ネギの土寄せ	A	B	D	C	D	B	B
	里イモの追肥	A	A	D	D	D	A	A
	里イモの土寄せ	A	B	D	D	D	B	B
9	草取り	A	A	B	C	D	A	A
	荒起こし	A	B	C	C	D	B	A
	畝作り	B	B	D	D	D	B	B
	秋大根の種まき（補助具有り）	A	－	D	D	C	A	A
	長ネギの土寄せ	A	B	D	D	D	A	A
	五寸人参の追肥	A	B	D	C	D	A	A
	五寸人参の土寄せ	A	B	D	C	D	B	B
	秋大根の追肥	A	A	D	C	C	A	A
	五寸人参の間引き	A	B	C	C	－	A	B

10	秋大根の間引き	B	B	C	C	D	−	−
	秋大根の追肥	A	B	C	C	D	−	−
	里イモの収穫・水洗い	A	B	−	C	D	B	B
11	短根ゴボウの収穫	A	B	−	C	C	A	A
	五寸人参の収穫	A	A	C	B	C	A	A
	玉ネギの苗植え	A	B	D	C	D	A	A
	小麦の種まき（補助具有り）	A	B	D	C	−	A	A
12	長ネギの収穫・水洗い	A	B	D	D	D	B	B
	秋大根の収穫	A	A	−	−	−	−	−
	フリーマーケットの準備	B	B	D	B	D	B	B
	フリーマーケットの販売	A	C	C	C	D	B	C

生徒の様子として、今日の作業内容を知らせることで今から畑で作業をするという大まかな見通しはほとんどの生徒がもてるようになった。しかし、作業場で今から行う作業に用いる用具を準備するなどの積極的な行動までには至っていない。次に生徒に見られた変化などについて箇条書きで示す。

・作業項目の名称を覚え、作業内容をイメージできるようになってきた　（I男　N子）
・畑に向かう前に長靴、軍手、帽子で身支度をすることで気持ちを作り、それによって作業場所への移動もスムーズになってきた　（K男　M子）
・一人でも畑の方向に足を向けることができ、先に作業場で待っていることができるようになった　（S男）
・いくつかの用具の名称を覚えて、指示により取ってくることができるようになった　（I男　T男　N子　Y男）
・友だちの作業を見て興味をもち、作業したがるなどの様子が見られるようになってきた　（K男）
・同じ作業が何回か繰り返されることで見通しがもて、声かけにもスムーズに応じて作業に臨むことができるようになってきた　（M子）
・荒起こしや追肥など、何度も繰り返し行われる作業では鍬の扱いや打ち方、肥料のやり方などが上手になり、一人でも任せられるようになった　（I男　T男　N子　Y男）
・草取り作業でバケツと鎌を手に椅子に座り、ほとんど一か所だけをコツコツと行っているのだが、本人には作業を頑張っているという意識があり機嫌良く過ごす　（K男）
・育友会のフリーマーケットでの野菜販売では、接客活動に多少はぎこちなさが見られたものの、張り切って品物や金銭の受け渡しができた　（I男　K男）

4．考察とまとめ

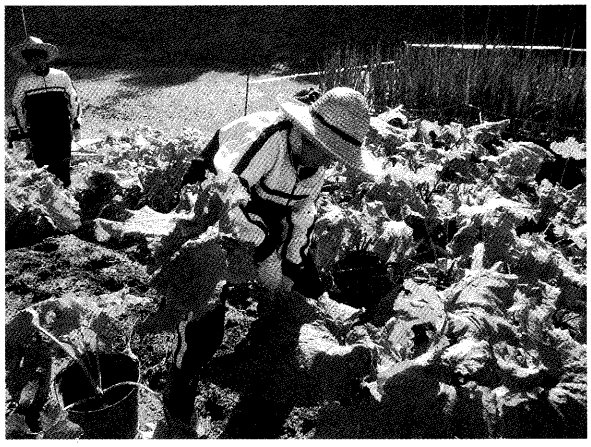
「生きる力」とは何かを考えれば、それは対人間力、対社会力、対自然力であり、それらを今の生活の中に総合的に生かしていくことのできる力であると考える。今までの学習や体験を通して会得した知識や技術をもとに、そこから生まれる感覚を大切にして自分自身を表現していくことではないだろうか。生きる力は短時間・短期間で身につくものではなく地道な日々の生活の中で培うものであろう。そのためにも今一番身近な学ぶ場としての授業を豊かな生活につなぐための魅力ある場にしていくことが大切になる。

今、行っている授業が何につながっていくのか。単に野菜の栽培・収穫作業と販売活動だけでなく、人にとって大切な「食」につながっていくことを感じるような活動の一つとして試食活動を行った。栽培した野菜が子どもたちの目の前で馴染みのある料理に生まれ変わっていく。その料理を食することで、野菜に対して親しみを増すとともに、販売活動に対しても意欲的・積極的になることを期待した。また、販売活動などにより得たお金が何にどの様に使われるのかを知らせ、学校生活の中での自分たちの存在や活動を肯定的に捉えられるようにしていきたいとも考えた。加えて子どもたちの実態を踏まえ、わかりやすい授業となるような教師側の発想や工夫を大切にしていきたい。

子どもたちにとって体験的な学習活動は単なる知識の獲得としての学習にとどまらず、実際に体を動かし、目の前のものが変容していくことで、より印象に残る活動となるのではないか。また繰り返され、さらに記憶を呼び起こされる学習は見通しをもちやすい活動として、よりわかりやすい授業となる。そこに安心感を伴った自信が生まれてくる。

夏期休暇中の作業活動は予定が立てにくいため教師側で行うことが多かった。また、冬季の栽培作業はほとんど無く、休止となる。学期や年度をまたぐことになる作業の在り方や栽培の方法などにはまだ考慮の余地があり、今後の課題であろう。

今年度は作業学習の中で何ができるのかを目の前の子どもたちのことを考えながら進めてきた。年間を通して一人でまたは援助を受けながら様々な作業を体験し、生徒一人ひとりのわかることやできることを増やしていく。「生きる力」を育むためのステップでもあると思われる。



11月　短根ゴボウ「収穫」

12月　長ネギ「水洗い」

5．おわりに

自然と人との共同作業である栽培は長い時間をかけて、その地域や土地に合わせて育み作り上げられてきた。四季の変化を肌に感じながら行う作業は人のもっている感性に直接働きかけてくる。じっくり時間を掛けることで意識や感性がゆっくり動きだす。

自分の手で植えた種が芽を出し、緑の葉が繁り、見えない土の中でも根がふくらんでいく。自分自身がかかわり、親しみをもってその成長を見守ってきた野菜たち。収穫の時、期待と不安が交差する。

体験することでそれまでの自分と違う自分が必ずそこにいる。一歩一歩の歩みは小さくとも、子どもたちの確実な成長を信じたい。